

イエス様の十字架（１） マタイ 27 章 27 ～ 32 節

——— 人類史上最も大きな 3 つの事件 ———

- ある歴史学者は次の様に言いました。人類史上で最も大きな事件を 3 つ挙げるとしたら、
- ・ 1 番目、神が人間としてこの世に来られたこと。すなわちイエス・キリストの誕生です。
 - ・ 2 番目、その神が死なれたこと。これは人間の死ではなく神の死です。
 - ・ 3 番目、その死んだ神がよみがえられたこと。イエス様の復活、イースターです。

彼は**イエスの誕生**と、**イエスの死**と、**イエスの復活**を人類史上最大の事件だと言ったのです。今日は、2 番目の、「神が死なれたこと」から、お話しします。

「兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。」（マタイ 27:32）

ユダの裏切りによって、イエス様は逮捕されました。その後、イエス様の裁判が続きます。徹夜での大祭司カヤパの所で・・・そして、ローマ総督ピラトの所で・・・そのピラトの裁判の特徴は・・・イエス様を何とかして十字架に付けようとする、祭司長、長老たちとの戦いでした。その頃、過ぎ越しの祭りの時には、ユダヤ人が望む一人の囚人を釈放する習慣がありました。群衆は強盗バラバの釈放を、そしてイエス様の死を要求しました。

群衆の声が勝ちました。ピラトは、イエス様の無実を確信していながらも、責任を放棄しました。そして彼は、当時の習慣に従って、群衆の前で手を洗ったのでした。

----- イエス様の苦しみ -----

（27 節）「それから、総督の兵士たちはイエスを総督官邸の中に連れて行き、イエスの周りに全部隊をあつめた。」

総督ピラトの兵士達はピラトより、有罪になったイエス様を引き取りました。そして、イエス様を官邸の中に連れて行きました。そこで彼らはイエス様をさんざん痛めつけるのでした。この官邸はアントニア要塞だと思われます。この要塞には、エルサレムの治安を守るために、約 200 人のローマの兵隊が絶えず常駐していました。この兵隊達がイエス様を嘲弄した（からかった）のです。

----- 兵士達のからかい -----

では兵士達はどの様にして、イエス様をからかったのでしょうか？

- ① （28 節）「そしてイエスが着ていた物を脱がせて、緋色のマントを着せた。」
彼らは緋色（赤紫）のマントをイエス様に着せました。彼らは自分達の着ていたマントをイエス様に着せたのです。こうしてこれを王様のマントに見立てました。あざ笑うためにです。
- ② （29 節）「それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、『ユダヤ人の王様、万歳』と言って、からかった。」
兵士達はいばらで編んだ冠をイエス様にかぶらせました。王冠の代わりにです。バラのとげどころではありません。このいばらがイエス様に激痛を与えたのです。
- ③ 更に葦の棒をしゃく（例えば天皇、王様などが、束帯を身に着けた時、右手に持つ、

細長い薄板)の代わりに、イエス様に持たせました。以上は、こっけいな間の抜けた王様を作り出しています。イエス様を笑う対象にするためです。
これが罪人で汚れている人間が真の神様、救い主にしている行為なのでした。

- ④ 更に、兵士たちはイエス様の前で、わざとらしくひざまずいたりしました。これは、祈りと礼拝の姿勢です。兵士たちは、イエス様を現人神（あらひとがみ）とされているローマ皇帝の地位においています。これらは相手を軽蔑するための、バカ丁寧のあいさつで、最もひどい侮辱のしるしなのです。

ある学校でいじめにあった生徒がされた行為は、みんなに囲まれて「イエス様、イエス様」と言われながら、わざとらしくひざまずかれたということでした。

- ⑤ 彼らは、そんなイエス様を前にして『ユダヤ人の王様、万歳』と言って、からかった。」のです。この当時の「バンザイ」と言う言葉は、ローマ皇帝にささげる歓呼の声でもありました。イエス様を現人神の地位に置いています。

- ⑥ (30 節)「またイエスにつばをかけ、葦の棒（しゃく）を取り上げて頭をたたいた。」この地方で「は、他人の頭にさわること失礼な行為ですのに、ましてやしゃく（葦の棒）で、頭をたたくとは・・・。

(31A 節)「こうしてイエスをからかってから、・・・」最後に、今までの精神的な攻撃の後、肉体的な攻撃が徹底的に始まるのでした。

- ⑦ (31B 節)「・・・マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。」今イエス様の背中はずでに 39 回もムチで打たれています。肉が裂かれ血が流れています。やがてそれが固まって、着物にも皮膚にもべっとりとついていていたことでしょう。彼らはそれをバリッと一気にはがしたのでした。

----- 君もそこにいたのか -----

当時の習慣では囚人は処刑場まで、自分が掛けられる十字架の横木を自分で背負って行かなければなりません。イエス様はこの時点で前夜から一睡もしていませんでした。食事もしていなかったことしょう。その上、全身たたかれ、ムチで打たれ、すでに深い傷を負っていました。十字架に掛けられる前に主は、すっかり弱り果ててしまっていました。ですから、イエス様は、その道の途中で何度も何度も倒れてしまった事でしょう。

それにしても、これが私たちの罪のために、私達を救うために、この世に来て下さった救い主に対する、人間からの仕打ちでした。でも、ここに書かれていることはよそ事なのではないでしょうか？ 実は私たちもこの群衆の中にいるのではないのでしょうか。そのことに気づかなければなりませんね。

新聖歌 113 番「君もそこにいたのか」の歌詞をお読みします。

1 君もそこにいたのか 主が十字架に付くとき
ああ何だか心が震える 震える 震える

君もそこにいたのか

- 2 君も聞いていたのか 釘（くぎ）を打ち込む音を
ああ何だか心が震える 震える 震える
君も聞いていたのか
- 3 君も眺めてたのか 血汐（ちしお）が流れるのを
ああ何だか心が震える 震える 震える
君も眺めてたのか
- 4 君も気がついたのか 突然日がかげろのを
ああ何だか心が震える 震える 震える
君も気がついたのか
- 5 君も墓に行ったのか 主を葬（ほうむ）るために
ああ何だか心が震える 震える 震える
君も墓に行ったのか

（32 節）さて、そんなイエス様の状態を見てローマの兵士達は、もうこれ以上イエスに十字架の木を負わせるのは無理だと判断しました。そこで兵士たちはたまたま出会った一人の男をとらえました。「兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。」

----- イエス様の十字架を背負ったクレネ人シモン -----

さて、クレネ人、シモンのことですが、このクレネは北アフリカのリビヤ地方の町です。このクレネには当時、多くのユダヤ人が住んでいました。ですからシモンは北アフリカのクレナイカの首都クレネ出身のユダヤ人でした。この時期にはこのアフリカからも多くの人々はエルサレムに巡礼をするためにやって来ていたのです。彼は黒人であったようです。聖書はこのシモンについてあまり詳しくは書いていません。しかし、彼の登場はこの27章の中でオアシスのようです。なぜなら彼はただ一人イエス様の苦しみを負ったからなのです。たった一人彼だけが、この所でイエス様の十字架を負っているのです。

----- 生涯忘れることの出来ない経験 -----

シモンにとって、イエス様の苦しみの十字架を背負ったことは、生涯彼にとって忘れることの出来ない経験となりました。

しかし、実際の所シモンは喜んでではなく、本当はいいやいやながら十字架を背負ったようです。ね。（32 節）「彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。」と書かれている通りです。でもいいやいやながらもいいんです。きっとシモンは後になってから、「あの時ことわらなくて良かった」と思ったはず。私たちも、いいやいやながらも誰かの重荷を負ってあげましょう。そのいいやいやを繰り返していくうちに、いつの間にか喜びながら重荷を負えるようになれるかもしれません。そうなったら素晴らしいですね。私たち日々イエス様の重荷を少しでも負わせていただくようにしましょう。

----- 実際はイエス様がシモンの十字架を負った -----

さて、シモンがイエス様の十字架を負った事ですが、実際の所はどうでしょうか、シモンがイエス様の十字架を背負ったように見えますが、実はイエス様がシモンのすべての罪の十字架を負われているのですね。私たちも隣人の重荷を負った時に、イエス様の愛が本当に体験的に良くわかるようになるのです。わかるようになりたいですね。

----- イエス様はシモンを、更に家族までも救われた -----

それにしても、イエス様は十字架の途上にあつてシモンを救われました。それだけではありません。更に主は、シモンの家族も救われました。

そして今、主はあなたを救われて、更に続けてあなたの家族をも救おうとされているお方なのです。救いの御業がまずあなたから始まり、あなたの家族を通して更に、地の果てにまで広がって行くようにと主に祈り期待しましょう。

(使徒 16:30)「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

残念なことです、コロナウィルスは短期間のうちに、あっという間に、世界中に拡散されて行きました。このウイルスに負けないように、私たち人を癒し、人を救う福音をこの地に広げて行きたいと思います。

最後に、一粒の麦のお話を、いたします。

----- 一粒の麦 -----

私は以前、名古屋に住んでいた頃、教会の裏庭にジャガイモを植えた時がありました。芋を4つに分けて植えたのですが、数ヶ月経って掘ってみると、10個程の小さな芋が親芋の回りに鈴なりになっていました。親芋はと見ると、中身が全くなくなっていて、皮ばかりがわずかに残っていました。子供の芋に命を与えるためには、親芋の死が必要だったのです。

----- 死んで実現されること -----

キリストはある時、次の様に言われました。「私が十字架で死ぬ時、すべての人を私の所に引き寄せる。」

確かに、キリストの一生は、病人をいやし、パンで群衆を養い、御国の説教をして、人々に大きな感動を与えました。しかし、「すべての人を私の所に引き寄せる」とおっしゃった、その業は、彼の死から始まったのでした

(ヨハネ 12:32、33)「わたしが地上から上げられる時、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。これは、ご自分がどの様な死に方で死ぬことになるかを示して言われたのである。」。

聖書の言葉。「まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」(ヨハネ 12:24 節)

主は、私たちにご自分のたった一つの命を捧げてくださいました。ですから、私たちもこれからの人生、このお方の愛に答えて生きる人生を送りたいものです。